

民 謠 漁 夫

平 地 幽 嶺

四國島根は海から曉けて

紅い陽が作りや金波が踊る

島か霽かや波路の果は

海は半で陽が消える

「オーイ

東風が強いぞ

七分の帆だぞ

後ギユツとべめ

船綱ゆるめ

右舷に氣を張れ

帆を誤るな

鯉群は右沖だ

波路が光らあ」

七十老爺が弓なり腰を

グツと伸ばせて鹽聲擧げれや

朝の嵐が胸毛に弄び

うるし塗つたる頬が光る

四國島の根海幸の國

霧が霽れたか島浮き出たか

白い汀にサツと射す朝日

岩に眞珠の玉が飛ぶ

「オーイ

鯉群は近いぞ

帆を巻き下せ

初心な他國者に

笑はれまいぞ

海で生れて

浪間に育つ

俺等ゆづりの

うでより掛ける」

白髪頭にネチ鉢巻を

グツとべめ込みへ先に立ちて

はねる鯉を見卸すまなこ

赤銅作りの身が踊る

四國島根は山から暮れる

磯の小松にサツと吹く嵐

歸り鳥が帆前を飛んで

汀づたいに山に入る

「オーイ

ヤレサ若イ衆

潮流のちを掛ける

舟は重いぞ

八舳やちをそろへ

船ふねをしばつて

帆足を擧げた

歸り舟路ぢや

勢掛せかけけろ」

満みちる潮うしほを蹴こつて行く漁船

ザンブざんぷくと小波こなみがさわぐ

淡あい西日にしひが余光あまかりをよせて

サワグ舟舷ふねがはに玉たまが飛ぶ。

馬 子

秋は馳はせ來る四國山かけて

長い稻いねほがユラゆらゆれりや

緑滴きよたる青葉あおはがあせる

柿かきが緑きよか紅あかいは松まつか

雜木林ざもくりんに秋あきふかい

雜木林ざもくりんもほごなく盡つきりや

つきた續つきは峠たて茶屋

しはの婆おばが煎いじた番茶

そつとさし出いす赤前あかまへだれの

ニツにと笑わらつたあの娘むすめが可愛かわいい

可愛かわいいくで今日けふも來きた

秋は馳はせ吳なる四國山かけて

サツト吹ふく嵐あらしに並木なみきがゆれりや

馬うまの鈴音すずねに舞まひ降ふるもみぢ

雜木林ざもくりんの秋あきふかひ

